



# 南山大学人類学博物館 MUSEUM NOTES

- ・上智大学西北タイ歴史・文化調査団について  
～調査中の一幕～
- ・南山大学人類学博物館のマコンデ彫刻

VOL.8 2022.10

## 上智大学 西北タイ

### 歴史・文化調査団について

#### ～調査中の一幕～

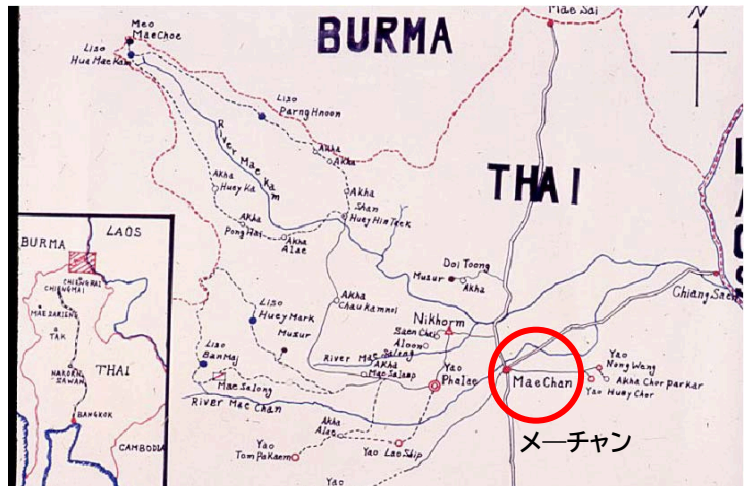
南山大学人類学博物館では、上智大学西北タイ歴史・文化調査団(以下調査団)が一九六九年から一九七四年にかけて、三回にわたって調査収集した衣装や生活道具などを数多く展示しています。その中の衣服や神画、文書についてはこれまでに紹介がありました(過去の museum Notes 参照)。

今回は、調査団がどのような場所を拠点にしていたのか、また調査の合間にあつた出来事の一部を紹介します。

調査団は三回の調査において、タイ北部のチェンライ県を中心に各地へ調査に出向いています(図一)。宿舎となつたのは、チェンライ県メーチャン郡の町にある、タイの山民族学者 Boonchuey Srisavasdi 氏の家です(写真一、二)。



写真一 メーチャンの宿舎



図一 調査団による手描きの地図



写真二 宿舎内の団員の部屋

メーチャンの町は北に三十キロでミャンマーの国境、東に三、四十キロでラオスの国境に到達し、中国の雲南省にも近い場所に位置しています。移動生活を営む多くの山民族集団が集結する場所であるため、移住経路や社会構造、民族間の関係性を研究する調査団にとって絶好の場所でした。ここを拠点として車が通れる道は車で、車が通れない山道は馬や徒歩で移動して、山間部に点在する村で調査を行いました。調査には通訳が同行し、葬式や結婚式があると聞くと撮影や調査に出かけました。全員で同じ場所を調査すること



写真三 診察の様子



写真四 映画を観るユーミン族、通訳



写真五 映画を観るユーミン族



写真六 映画を観るアカ族



写真七 映画上映会の出店

もあれば、目的によっては何組かに分かれて別行動をとることもありました。調査中は夕食後に打ち合わせの時間を取り、調査の進捗状況の共有や軌道修正を図っていました。調査をしない日は収集した調査の整理をしたり、周辺の博物館や遺跡の観光、買い物をしたりしていたようです。日本や近隣国から団員を訪ねて研究者が調査の見学に来ることもあり、医療関係者が来た際には、山地民に対しての医療活動も行われました(写真三)(一九七四 西北タイ歴史・文化調査団)。

写真四～六は、二次調査中の一九七一年十二月二十五日に、メーチャン郡にあるノンウエンというユーミン族の村で撮影されたものです。この日、ノンウエンでは昼から夕方にかけて結婚式が執り行われ、夜にはBonchuey 氏や同じく研究者であり調査団員の身許引受人の Thongsuk Rakmanusa 氏がアレンジした山地民の映画上映会が開催されました。一部の調査団員が結婚式、映画上映会に参加するため、メーチャンの宿舎からノンウエンに向かいました。映画上映会にはユーミ

ン族の他に近隣のアカ族が参加し、上映後にはアカ族によるダンスも披露されました。出店も並び、賑やかな催しだったようです(写真七)(一九七四 西北タイ歴史文化調査団)。

調査の成果は『東南アジア山地民族誌―ヤオとその隣接諸種族―』や論文などで報告されています。しかし所蔵している写真や日誌からはそこには載せられていない調査中の出来事を垣間見ることができ、非常に興味深いものです。

(南山大学人類学博物館  
学芸員 秦 優莉香)

【参考文献】

白鳥芳郎

一九六九「研究ノート 西北タイ山地民族探訪の記録―タイ国における歴史・民族学の研究現状」『上智史学』十四：二一九―二三八 上智大学史学会。

一九七二「上智大学西北タイ歴史・文化調査団報告」

『上智史学』十六：二二九―二三二 上智大学史学会。

白鳥芳郎・竹村卓二

一九七〇「研究ノート 上智大学西北タイ歴史文化調査団の成果―略報―」『上智史学』十五：二二二―二二八 上智大学史学会。

中塚発夫

一九七二「第二次上智大学西北タイ歴史文化調査団の成果 略報」

十七：八三―九一 上智大学史学会。

西北タイ歴史文化調査団

一九七二「西北タイ山地民族第一次調査日誌」

『上智人類学』二：二二―二二八 上智人類学研究会。

一九七四「西北タイ山地民族第二次調査日誌」

『上智人類学』三：二二―二二九 上智人類学研究会。

白鳥芳郎編

一九七八『東南アジア山地民族誌―ヤオとその隣接諸種族―』講談社。

## 南山大学人類学博物館の

### マコンデ彫刻

マコンデ彫刻とは、東アフリカのタンザニアとモザンビークの国境付近に広がる海拔五〇〇〜八〇〇mのマコンデ高原(地図一)に暮らすマコンデ族によって作られた彫刻のことを指します。現在はタンザニアにおける代表的なアート(註一)のひとつとして知られています。

南山大学人類学博物館のマコンデ彫刻は、故西江雅之氏によって収集され、二〇一五年度に当館に寄贈されたコレクションの一つです(以下、西江コレクションと称する)。言語学・文化人類学者である西江氏は主に東アフリカ、カリブ海、インド洋諸



地図一 マコンデ高原(井原 2021)

島で言語と文化の研究に従事し、

東京外国語大学、東京大学、早稲田大学、東京芸術大学などで教鞭をとられました。西江コレクションは、大まかにアフリカ、

パプアニューギニア、アンデス地域などの資料のほか、動物のほく製など、多岐にわたる資料によって構成されており、その数は九〇〇点以上にもおよびます。なお、二〇一八年度に常設展示

の一部を入れ替え、西江コレクションコーナーを新設しました(写真八)。

ではさっそくマコンデ彫刻についてご紹介します。前述のとおり、マコンデ彫刻は東アフリカ地域のマコンデ族によって作

られた始めた彫刻です。木材にはアフリカンブラックウッドという非常に硬く密度の高い高級木材が使用されています

マコンデ彫刻の主な様式には人や動物などの具象彫刻(写真九・十)、ウジャマ彫刻(写真十一)、シエタニ像(写真十二)、抽象彫刻(写真十三)があります。

#### 【人や動物などの具象彫刻】

人々の日常生活を描いた作品が多くみられます。例えば、頭の上に水瓶を乗せて運ぶ人や、太鼓を演奏する人、バナナの房を抱えている人などがあります。動物の彫刻作品は、タンザニアの主要観光である野生動物のサファリツアーをイメージしたもので、ゾウやキリンなどが多く製作されています。



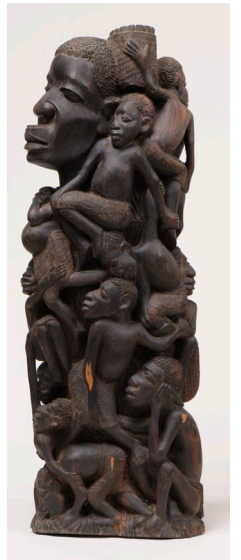
写真九・十 具象彫刻  
左 太鼓 右 バナナの房を背負う人  
(高さ約 20 cm)

#### 【ウジャマ彫刻】

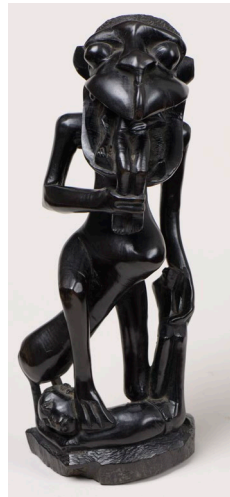
複数の人々が積み重なるようにして彫られた彫刻です。ウジャマという言葉はスワヒリ語註二)で家族愛や家族の連携などを意味する言葉で、ウジャマ彫刻は家系図や家族が協力しあっている様子を描いています。

#### 【シエタニ像】

シエタニとは、マコンデ族に古くから伝わる精霊や悪魔のことを指します。シエタニは人を助けることもすれば、悪さをする生き物として考えられています。シエタニ像はその姿を表現したものです。シエタニ像の造形には決まったルールはなく、人のような姿をした作品もあれば、怪物のような姿をした作品など様々です。



写真十一 ウジャマ彫刻  
(高さ約 50 cm)

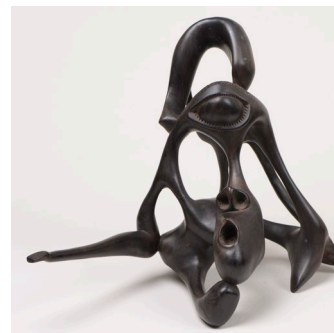


写真十二 シェタニ像  
(高さ 27 cm)

【抽象彫刻】

一九七七年にマコンデ彫刻家クレメンティ・マティ氏によって考案された様式です(マコンデ美術館二〇〇三)。クレメンティ・マティ氏はヨーロッパで開催されたアフリカ美術の展覧会に同行し、その旅先でヨーロッパの抽象的な現代アートを見て学び、帰国後にマコンデ彫刻にも抽象的な表現を取り入れ始めました。曲線や球体を多用した作品が多いです。

続いて、マコンデ彫刻の歴史を紹介します。マコンデ族は古くから儀礼に用いる仮面(写真十四)や守護神の像などの彫刻を行っており、木彫りの名人として知られていました。一九二〇年代に、モザンビークのマコンデ族の居住地で布教活動を行っていたポルトガル人宣教師が、



写真十三 抽象彫刻  
(高さ 32 cm)

マコンデ族の彫刻技術に注目し、マコンデ族にマリア像などのキリスト教に関連する彫刻を作らせました。この頃からアフリカンブラックウッドを使用した彫刻作品が作られ始めました。彫刻は教会などに売り出され、商品として生産されるようになります。マコンデ彫刻の製作は、モザンビーク国内で始められましたが、ポルトガルによる植民地支配の激化などにより、モザンビーク国内での居住が困難となったマコンデ族の多くがルブマ川を渡ってタンザニアへ移住しました。

一九五三年になると、タンザニアの中央都市ダルエスサラームにマコンデ彫刻の工房と販売所を兼ねた施設が作られ、マコンデ彫刻の生産量が大幅に増加しました。(岩崎二〇一一)。



写真十四 仮面  
(縦 約 30 cm)

一九六四年にイギリスから独立したタンザニアは、一九六〇年代後半以降、国の文化のアピールのために、海外の展覧会などでマコンデ彫刻を出品します。そうして国内外でもその存在が知られるようになりました。

一九七〇年の大阪万博のタンザニア館においてもマコンデ彫刻が紹介されます。一九八〇年代になると、タンザニアへの海外旅行客が急増し、マコンデ彫刻は土産物としての需要が高まってきました。

このような過程を経てマコンデ彫刻はタンザニアを代表するアートのひとつとして知られるようになりました。

当館では西江氏が収集したマコンデ彫刻約三〇点を収蔵しており、うち六点を常設展示しています。マコンデ彫刻の重さや質感、彫刻の繊細さをぜひお手に取って実感いただきたいです。

(南山大学人類学博物館  
学芸員 井原 瑠梨)

【註】

(一)アート

本稿では鑑賞的価値を有する絵画や彫刻作品等の創作物全般を指す。

(二)スワヒリ語

スワヒリ語は東アフリカ海岸部及びインド洋に浮かぶ島々で広く使用され、ケニア、タンザニアでは公用語として使用されている言語である。バントゥー諸語に分類される。

【参考文献】

マコンデ美術館 編著

二〇〇三 「マコンデ彫刻」 マコンデ美術館。

岩崎明子

二〇一一 「イメージが作る工房、工房が作るイメージ」 タンザニアアートの制作現場」

『共在の論理と倫理』 家族・民・まなざしの人類学』pp.三三四-三四八 はる書房。

井原瑠梨

二〇二二 「南山大学人類学博物館が 所蔵するマコンデ彫刻について」 『南山大学人類学博物館紀要』四二号 二九-四三 南山大学人類学博物館。

南山大学人類学博物館

「museum notes」VOL.8

二〇二二年十月発行

編集・発行 / 南山大学人類学博物館